

了智局用

山名氏研究ノ一ト
赤松氏

第 2 号

序にかえて----- 貝 原 俊 民

二杉家と修験----- 二 杉 國四郎

赤松余滴録----- 萩 原 初 治

偶感----- 西 山 良 造

久留米藩主有馬伯爵家の栄光----- 編 集 部

宗鑑寺殿古鑑道衡大居士に関連して----- 宮 田 靖 國

太平記と赤松氏----- 吉 川 広 昭

末裔登場

赤松氏関係名簿

あとがき

平成 3 年 4 月

山名 両 氏 顕 彰 会
赤松



赤松円心公像（円心廟堂奉安）



兵庫県赤穂郡上郡町苔縄



金華山法雲寺 本堂・円心廟堂



赤松円心公墓 (久昌院墓地)



臨濟宗大本山建仁寺塔頭 久昌院

赤松氏縁故の寺院



赤松則祐開基の赤松山宝林寺 (兵庫県赤穂郡上郡町河野原)



大燈国師(円心公甥)誕生の宝林寺
(兵庫県竜野市揖保町門前)



城山城陣歿将士供養塔と恩徳寺
(兵庫県竜野市揖西町中垣内甲)

赤松氏縁故の寺院



和歌山県伊都郡高野町高野山五七一

別格本山 赤松院

貫主 藪本寿紀

縁起

当院は、延長元年聖快阿闍梨の創立で山本坊と云われていました。

その後、元弘年間護良親王当院に御在院当時、赤松則村随従し、入道して円心と称され以後赤松院と改め、赤松家一族の菩提所となり、現本尊十一面観世音菩薩と共に、自己の寿像並びに系譜等を納められる。

江戸期には、細川・有馬家の菩提寺となり、二、〇〇坪の庭園は山内第一と称せられ、現宿坊は収容客三百名の宿泊設備が整っている。

場所は奥の院入口に一番近く便利な場所である。山にはこうした宿坊が五十三ヶ寺有る。

序にかえて

兵庫県知事

貝原俊氏

謹啓 薫風爽やかな好季節となりましたが、ご健勝のこととお慶び申しあげます。

さて、このたびは丁重なるお手紙をいただき、誠にありがとうございます。

兵庫の地を舞台に、山名氏・赤松氏が繰りひろげられた壮大な歴史を偲ぶ慰霊祭が、四百年ぶりに取りおこなわれましたことは誠に意義深いことと存じ、心よりお喜び申しあげております。

また、慰霊祭を実現するにあたっての、山名様をはじめ皆様方の一方ならぬご努力を拝察し、敬服いたすとともに、これからも、両家の皆様のご交流が、末長く続きますことを祈念いたしております。

今後とも、どうかお身体には十分ご留意いただき、ますますご活躍されますことを、お祈り申しあげます。

まずは、とり急ぎお礼まで。

敬 具

五月 十八 日

山名 両氏顕彰会の皆様
赤松

兵庫県知事

貝原俊氏

謹啓 残暑厳しい日が続いておりますが、ますますご健勝のこととお慶び申しあげます。

平素より、県政の推進につきまして格別のご支援ご協力を賜り、厚くお礼申しあげます。

さて、このたびは丁寧なお手紙とともに「研究ノート第一号」や新聞記事をご恵贈いただき誠にありがとうございます。

大変興味深く拝見させていただきましたとともに、この書籍をまとめるにあたってのご苦勞を拝察し心から敬服いたしております。

今後とも、お身体には十分ご留意されますとともにますますご活躍されますことをお祈り申しあげます。

まずは、書中にてお礼まで。

敬 具

八月 二十二日

山名 両氏顕彰会事務局
赤松

吉 川 広 昭 様

一杉家と修験

一杉 國四郎

三木史談第九号に「我が家の文書」として家蔵の古記録の目録と家系のみを報告したので、今回は修験道を中心に祖先の足どりを辿り、併せて西這田の山伏グループの実情を覚え書した。

法界寺でお祀りしている別所公御位牌の傍らに、我が家の祖先の為之亟（為之助）の「道春禪定門」位牌も祀られている。この為之亟に三人の男子があった。

嫡男国四郎道範は、父の戦死後、祖父母に育てられ、二人の弟と共に西這田村で農を営みつつ、書を読み剣を習った。名字帯刀を許され、農の傍ら、読み書きと剣の道を近隣の子弟に教えたという家伝がある。

三代国四郎忠範、四代国四郎治忠、五代国四郎治英、

六代国四郎英隆と代々農を以って栄えた。修験の道に入ったのは七代家長からである。

家長は通称太兵衛といい、元禄三年（一六九〇）に生れた。当時畿内一円は大峯山の修験信仰の隆盛時代であったので、太兵衛も修験道を修め、やがて先達となり、明和年間に大峯山桜本坊より智光院の号を賜り、権律師権少僧都にも補任せられるようになり、近郷の信者をひき連れて毎年、大峯山参拝登山を続けた。明和七年（一七七〇）五月廿八日、八十一歳で他界。法名日明浄輪居士。

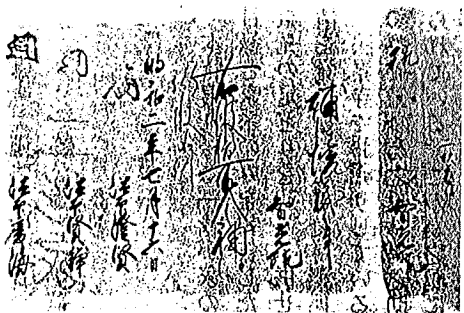
八代太兵衛も熱烈な信仰の持主で、天台修験の教師に補任され、智光院の法号を継承、安永二年（一七七

三) 卒した。法名日營淨貞居士。

九代弥兵衛雅英。寛保元年(一七四二)に生れ、文化八年(一八一七)七月十七日、七十一歳で逝った。

弥兵衛も亦、父祖に劣らぬ信仰に生き、先達に補任されている。法名寛無證智。

十代茂兵衛貞直に至って修験信仰は頂点に達した。浪花龍山廿九組と称する大講を結び、東播信者数百名の筆頭大先達として活躍した。明和二年七月十六日大峯山桜本坊より院号職智光院補任の允許を受けた。(写真①参照)。



写真①桜本坊よりの院号職智光院補任状

この院号は世襲された訳である。文化十四年(一八一七)正月二十五日没。法名智覚法性。

家藏の「龍山廿九祖先達旗」には

浪花

先達徳福院小二伊兵衛

大仙龍山

先達清光院神木善右衛門

龍山廿九組

俗大先達

播州三木西這田村 智光院二杉茂兵衛

とある。神木善右衛門は九代弥兵衛の二男で庄屋神木家に入った。男子がなかったので、善十郎備従が二杉家より入っている。二代続いた養子が、二杉出である。神木家は当時醸造を業とし、現在の北山家の銘酒「島美人」の原流であった。北山家と神木家とは姻戚関係にあった故であろう。文化十年(一八一三)十月十八日死去。法名日応理元居士。

三木市杣宮の神木虎之助氏はその子孫にあたる。この虎之助氏も若い頃、信仰に入り、大峯山龍泉寺から中興開山聖宝理源大師奉賛会地方委員に依頼されている。

なお茂兵衛、善兵衛(善右衛門でない)連名で、伊

兵衛なるものを脇先達に推せんし、その補任を願ひ出た書類の写しがある。

乍恐書付を以奉御願上候

一、西這田村^{二杉茂兵衛 神木善兵衛}右奉御願上候。兩人共二

御大切之御徳名被為仰付、難有仕合ニ奉存候

間、同村伊兵衛と申者、兼而信心能仕者ニ而御

座候。御慈悲之上、同先ニ而モ脇先ニ而モ被為

仰付候ハバ、猶々難有奉存候。並ニ右兩人之者

ニナノリ、乍恐奉御願上候。以上

願主西這田村

二杉茂兵衛

神木善兵衛

大先達 二杉茂兵衛貞直

大先達 神木善兵衛吉兼

先達 伊兵衛信保

御老大仙公様

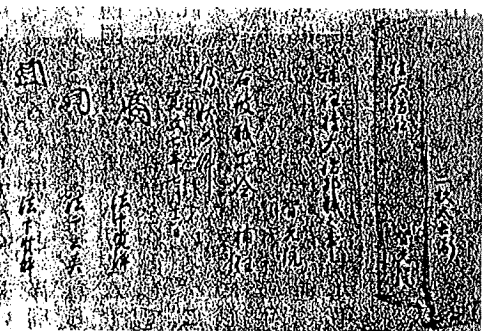
御取次 東這田村

正井勝右衛門

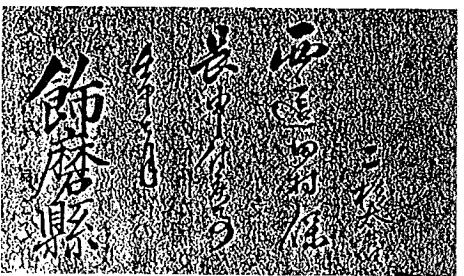
比勝安兵衛様

十一代太兵衛。智光院。寛政七年七月十六日、桜本坊より権大僧都職補任(写真②参照)、大先達として毎年信者を引卒して大峯山に参拝している。天保七年(一八三六)二月十一日没。法名寛山道寂。

十二代弥兵衛も大先達として信仰が篤かった。家業



写真②十一代太兵衛が桜本坊よりの権大僧都職補任状



写真③十三代太兵衛が壬申七月(明治五年)飾磨県よりの保長任命状

の傍ら、塾を開き、手習い、算盤の指導に当った。嘉永六年（一八五三）八月十五日卒。法名 法容篤浄。

十三代太兵衛。文政八年一月八日、弥兵衛、ゑんの長男として生る。嘉永二年（一八四九）家督相続。この人も大先達として大峯山へ参拝登山すること数を重ねたが一方、村年寄、保長（写真③参照）、石野組戸長役場時代の村会議員、這田組戸長役場時代にも一級議員として再選される等、公職を歴任、在田寺檀家総代、小和田神社、若宮巖島神社氏子総代を務めた。ただ義侠心に富む余り、人に頼まれると、いやと云えぬ性分から、人の借用証書にやたらと連判したため、明治十七年三月三十日に長男嘉蔵に家督を譲って隠居した。田畑四町歩、山林二町歩もあったのが、僅か田畑一町歩程しか残せなかった。明治二十五年七月九日、六十八歳で永眠。法名法蘭蓮台。

太兵衛には弟が多かった。次弟虎蔵は小舟家に養子に入り精農家として知事表彰をうけている。

三弟喜蔵は兵庫の豪商湯野家に入り「清兵衛」を名

日、孫の私が支那大陸に応召中に八十一歳で逝った。法名本覚諦意居士。

十五代国四郎。明治十九年十月六日生。昭和十七年九月二十二日病没。五十七歳。法名智光院淳国諦信居士。この人も先達として何度か大峯詣りをしている。当時入山した信者が現存する人々も高齢である。東道の小林光治元市議や横田集治さん、横田佐吉さん。西這田では小舟藤七さん、小舟止雄さん、国井正雄さん、小舟浩さん、神木源三郎さん、それに私国四郎（当時隆治）と、現在先達である神木愔さんである。

さて国四郎は三十回近く参拝登山している。出発に当って村内の棚池で身を浄め、帰るときは東南の山頂に奉祀する行者堂に詣り、待ちうけた村人に錫杖で身体をさすり神変大菩薩の御徳を頒つ行法を行い、護摩修法を執行していたのを記憶する。父は又黒住教に入信、八級信教の教位を得ている。西国巡礼に出たり、小和田神社総代を務め、消防小頭、水利委員、区長等も歴任した。また大峯山本部内道場龍泉寺より理源大

乗った。神戸区時代の一級議員として市議に推され、貸家八百軒も所有する程であったが、岸本銀行の重役であったので、銀行破産と運命を共にしてしまった。

竹中郁（竹中音三郎）等も親戚関係にある。兵庫財界に名を馳せた「三清兵衛」とは、湯野・川西・沢田である。

末弟為蔵は村内に分家。大峯山信仰の先達としても活動した。

十四代嘉蔵。安政六年（一八五九）三月生る。明治十七年三月家督相続。村伍長。なかなかの変り者で、書画に堪能なばかりでなく、若い頃は地方力士今出川関として活躍するかと思うと、浄瑠璃や文楽を嗜み、更に父祖の血をうけて大峯参拝も怠らなかつた。四国八十八ヶ所西国三十三ヶ所、小豆島八十八ヶ所などの霊場巡りも果たし、念仏柳谷節を修得して播州信楽会から世話役の嘱託を再三要請されている。このように神仏の信仰が篤かつたが、中年には財政的に恵まれず、金と女に苦勞した話も残っている。昭和十三年十月四

師奉賛会地方委員の依頼を受けた。本業の金物卸問屋（鋸専門）も順調な伸びを見せ、神戸の日本東亜必需品輸出組合に加盟して大いに志を国外に向けた。

十六代国四郎が私で、修験の道は至って浅い。しかし西這田では今も大峯山山上講を組織し、二杉照雄・神木愔両氏を先達として三十名程の講員が例年登山参拝を続け、信仰の伝統を絶やしていない。

私は、山伏としての先祖の峯入りの姿を思い浮べる。龍山廿九組の講旗を先頭に翻し、法螺貝を高々と吹き鳴らす山伏姿の一行。念珠を繰り、南無神変大菩薩、南無不動明王、南無聖宝理源大師と、仏名を唱えながら、力強く錫杖を突き立ててゆく。腰の太刀は降魔の利剣、腰の鈴の音も爽やかに響く。海拔三千余尺。山道を進む一行の浄衣は木立の色に愈々白い。同行の山伏と再三山伏問答をかけ合う道中も真剣である。特に先達は責任が重い。細心の注意を払い、登山修業の実を挙げ、無事下山を見届けねばならない。自分の登山修験を通して、父祖の労に思い当るのである。

註、二杉家は、別所氏の重臣で三禾合戦の侍大将であった二杉為之丞を祖とする。

赤松余滴録

萩原 初 治

有感 山名 顯彰会
赤松

薰風漾、緑但州天 供養塔前皆敬虔

戦国遺、名剛勇士 一詩賦冥想綿綿

薰風緑を漾はす但州の天

供養塔前皆敬虔

戦国名をのこす剛勇の士

一詩賦奠すれば想は綿綿たり

山名 両家鎮魂顯彰を企画推進、之を五月二十六日に
赤松 結実開眼供養をなし得たことは、ひとえに諸師諸先生
方敬仏敬祖の賜と、ここに深甚なる敬意を捧げるもの

である。供養開眼式に深い感銘を受け帰り、改めて町
当局に供養塔再建を願望し、平成二年七月十五日、日
生町長田原隆雄氏の返書を抜粋、改めて御参考に供し
たい。
「赤松則尚公に關してですが五輪（地名）の石塔が現
在行方不明となっておりますもの「千軒湾東泊附近に
あると推測されています」町教育委員会でも、文化財
保護委員会の皆さん方共々調査研究を進めながら対応
してまいるとのことであり、ご理解をお願い致します
（云云）町長返書の中に現在行方不明となっております
云云とあるが、仄聞するに昭和三十五年頃供養塔が所
在していた附近を発掘調査したが、其の後如何なる伝

手を求めたのが詳細は知り難いが、大阪方面の数奇者
か？新興成金か？ 船積して家の庭に設置したが、以
来同家は不幸が続き、其の為之を返却のため現地に來
たが、如何なる理由か「千軒湾東泊附近海中に投棄し
たとの通説になっている」なお供養塔や史説に関する
調査研究には、平成二年九月二十五日教育委員会並び
に文化財保護委員会では、上郡町教育委員会で説明を
聞き、更に赤松氏由緒の地、法雲寺（首実檢のありし
寺）宝林寺、松雲寺に実地踏査見聞に赴いた、十月末
日特別史跡閑谷広釈菜（孔子祭）には、日生町南教育
長等と招待され同行した際、供養塔再建について教育
委員会の方針を聞き、更に年末町長に面会之を再確認、
意を強くした次第であり、平成三年一月十三日山下日
生文化財保護委員長に面接した際、供養塔の存在して
いた附近（現在建設予定地）は国有地になっているの
で（岡山営林署所管）日生町営林署出張所長の言に依
れば、反対するのではないが申請者、並びに今後の維
持管理の明確化を定めて欲しいとのことであり、近く

町長と岡山営林署長の会談が予定されているとのこと
である、且平成三年度十一月を目安に準備を進めてい
るとのことであり、近く建立するなれば確たる揭示を
せねばならず、論拠を求めに更に上郡町某旧家に秘蔵
してある（文書と系図）文献を調査に、教育委員、文
化財保護委員が赴くとのことである、供養塔再建予定
地より更に東方の海浜には、古代体験村を設け、着々
準備を進め、青少年、或は訪れる人で体験希望者には、
文字通り原始体験をする茅葺の十棟程の古代集落を建
て（殆んど完成とか）又附近に備前藩主池田光政公の
鹿狩に來ていた故地（御前岩と称する岩あり）あり、
将来供養塔附近より、体験村經由御前岩附近まで遊歩
道を設ける予定とか、横道に話をそらし、或は拙文を
弄し慙愧の至であります、要は小生の言はんと欲する
所を諒せられていただければ幸甚です。

合 掌

偶 感

西山良造

新年おめでとうございます。

昨年暮には貴重な研究ノート送っていただきまして本当に有難とうございました。厚く御礼申し上げます。

山名氏の研究熱心な方々につくづく頭が下がります。こちら赤松氏の方は、上郡の藤本哲氏がよく研究され、本も発行されておりますので、両方併せれば、どんなに歴史が新発見されるでしょうか楽しみに思います。

私は赤松の直系ではありませんが、妻が旧姓赤松を名乗っており、妻の実家の事について少々書きたいと思ひペンを持ちました。

妻の生家は、岡山県勝田郡奈義町中島西二四五番地です。もう生家も、田畠も屋敷も手放してしまつて、残るは墓地のみとなっております。この墓地が広くて、樹令三百年はあろうかと思う大きな桜の木と柿の木。

そしてもう崩れかけた五輪の塔が三基と、苔むした石に何かのよすがをただよわせているばかりですが、妻の老母より聞き出した物語りを書きとめておきたいと思ひます。

昔々、赤松氏が残党を率いて落ちのびた所が、美作の国みなぎと云う所でした。そこで農家に頼み大根と味噌を買ひ求め、皆で祝杯を上げたそうです。そして百姓として名前を赤松久作と改め、代々長男は久作と

名乗る事になっております。

昨年、何十年振りかに故郷をみたいと八十五才の母の願ひを入れて訪れました所、「御本家様が帰つて来んさつた」と母の友達や村人が出迎えて下さつたのはびっくりしました。

故郷を思う時、もう絶えてしまつた赤松本家を思う時、母の胸中はいかばかりかと涙を禁じ得ません。

母は女子故にこれ以上の話は聞いておらず残念至極でございます。昔には、系図や鎗や、小判がめに刀二振りと残っていたようですが、人に乞われて放してしまひました。小判がめはお寺様に渡し、やりの（三間やり）の柄だけが一本、妻の妹宅に残されています。

墓地も、最後の男子が戦地へゆき戦死、あとは女子ばかり都会へ出ていき、きちんとした守り人がありません。かろうじて妻の母が村人にたのみ細々と草刈りをしてに過ぎず、私が守つていこうと決心した所へ、山名・赤松氏の研究ノートが届きまして、これこそきつと御先祖様のお引き合せかと思つています。

上郡の法雲寺様へ、祖母・祖父が二日かかりで、昔はひそかにお参りを続けていたそうでございます、その法雲寺も再建され、本当に嬉しいことでございます。ひそかにひそかにと、移り住んだ美作の赤松氏、百姓として生き続けた赤松氏、赤松の誰が先祖なのか、何一つ分かりませんが今後共よろしくお願い申し上げます。

老母（八十五才赤松こいと）の話も、現在、余命いくばくもなく入院中で、返事が、お礼が、おくれましたこと重々におわび申し上げます。

研究ノートに書いていただく様な原稿ではありませんが、思ひのままに雑感を書き並べました。

久留米藩主有馬伯爵家の栄光

編集部

仁和寺宮嘉彰（のち小松宮彰仁）親王は、世紀の鳥羽伏見の決戦に際し弱冠十八歳で征討大將軍となり幕末史に名を残すが、この宮の夫人となったのが有馬家の幕末の当主頼威の息女頼子である。また、仁和寺宮の弟宮輪王寺宮（のち北白川宮能久親王）の王女貞子が頼威の孫頼寧に嫁した。

頼寧の父頼萬は明治・大正の当主だが、旧弊なしきたりを重んじた人だった。

『華族物語』（昭和七年刊、山口愛川著）によると、時代ばなれのしたお大名気質の人だったという。橋場（浅草）の本邸の奥ふかくに大勢の召使にかしずかれてめつたに外出しなかつた。

頼寧は、華族の身ながら播磨期の社会主義運動に身を投じた。ベストセラー『死線を越えて』で一世を風靡した社会運動家賀川豊彦や『貧乏物語』の河上肇らの影響をうけた。労働学校をつくりたり差別解放の水平社運動に献身し、当時の金で四十万円（現在の十億ぐらい）もつかった。高利貸しの門もくぐったといわれている。

北白川宮の王女貞子と結婚したのは、頼寧二十歳のときで、花嫁は十七歳であった。まだ学習院の生徒で、当時下級生の近衛文麿（のち首相）が「有馬さん御結婚」と叫んでひやかしたという。のちに作家となった長男頼義は、母の貞子の生涯を記録にのこしている。

大正十二年九月一日、東京に大震災が突発し下町は全滅に瀕したが、このとき頼寧は率先して罹災者の炊き出しや、米・麦・馬鈴薯をはこんで無料配布した。

翌年かれは衆議院議員選挙に出馬。華族としては破天荒なことだった。伯爵を相続すれば貴族院議員に選出されるのである。

外出するときはそれこそ大掛りなもので三太夫や腰元が前後左右をとり囲み、

当時、

「有馬の殿様のお出まじよ」

と界隅の名物になっていたという。

嗣子の頼寧はその正反対で、華胄界の革命児といつていい。

『華族物語』は、

「……日比谷公園の草摺りで同族をアツと驚かせ、農村問題の研究では、真新しい意見を吐く。次には水平社運動の先駆者になって同愛会を起したが……」

とその異色ぶりをのべている。

貴族院をバックにした清浦奎吾内閣反対を旗印にした。選挙区を久留米藩二十一万石のお膝元にちかい福岡十二区三井・浮羽両郡であり、当時の大政党政友会から立候補した元名古屋市長を破って当選した。

しかし代議士生活二年にして、資格を喪失する。父頼萬の死により伯爵をついだのである。貴族院へうつらねばならなかつた。

有馬家の発祥の地は摂津（兵庫県）有馬郡有馬庄である。

いまの神戸市北区有馬町。神戸電鉄で湊川駅から四十分の有馬温泉駅である。西暦六三一年ごろからすでに温泉の名が高く、道後や草津とならぶ名湯である。豊臣秀吉や黒田官兵衛もこの湯につかっている。

先祖は、足利尊氏について活躍した赤松則村のわかれという。則村の孫義祐が有馬郡に城をもち、有馬姓を名のつたのがはじまりである。

久留米藩初代は豊氏だが、世にあらわれるのは豊氏の父則頼の代である。則頼は播磨（兵庫県）の三木満

田城主重則の子に生まれ、のち秀吉の御伽衆（主人の話し相手）にとり立てられる。天正十九年（一五九二）には摂津・播磨で一万石余の所領をもらい、織田信長の突然の死による天下の争奪戦にも一役果した。清洲城の重臣会議で柴田勝家はライバル秀吉の殺害を企図したが、その空気をいち早く察した則頼は、剣をかまえて秀吉をまもったという。



有馬豊氏

子の豊氏は、関ヶ原役では徳川に味方し、最初福知山六万石の城主となった。ついで父則頼の遺領二万石をつぎ八万石となったが、更に元和六年（一六二〇）、筑後久留米二十一万石に加増された。

有馬藩は、近代科学と縁

がふかい。

八代目の頼徳は大名としては珍しく数学家として令名をはせている。関孝和の衣鉢をつぎ、点竄学（代数）、弧脊術（円の研究）にすぐれ、『拾璣算法』（全五巻）という代数学では本邦初の出版をしている。

幕末にも久留米藩からは発明家が出た。田中久重は、わが国で初めて汽船のヒナ型を琵琶湖で運転し、鷹司卿より「日本第一の細工師」と絶讃された。戊辰戦争で威力を発揮したアームストロング砲や最初の汽船凌風丸もつくった。

またこの地の特産久留米ガスリは井上伝子をはじめたものだが、士族の授産事業として藩が奨励したものだ。西南戦争の従軍兵が、帰国土産に久留米ガスを買ってかえったのが全国にひろまるきっかけだったという。

昭和十二年六月——。

第一次近衛文麿内閣が組閣された。

この年日中戦争がはじまり、日本は第二次世界大戦

の破局に向かって決定的な歩みを進める。

頼寧は近衛の友人でありプレーンでもあった。近衛内閣には農林大臣として入閣し、また大政翼賛会ができる初代の事務総長に就任した。もともこのときは、右翼の反対にあつて五カ月で辞任する。

太平洋戦争が敗戦でおわると、占領軍による戦争責任の追及がおこなわれ、頼寧は戦時中の経歴をとわれ、A級戦犯として、巣鴨拘置所に留置される。絞首刑になるかもしれない不安な日々をすごしたが、さいわい釈放された。

かれの『七十年の回想』によると出所するとき懐中無一文、小さな風呂敷包み一つもったきりで、電車賃を交番で借りてやっと西荻窪の自宅まで帰りついたという。追放を解除されて中央競馬会理事長などの職についたが、昭和三十二年に亡くなった。

頼寧と貞子夫人の間に生まれたのが、作家有馬頼義である。『終身未決囚』で昭和二十九年上半期の直木賞にえらばれ、『四万人の目撃者』で日本探偵作家ク

ラブ賞（現推理作家協会賞）をうけ、松本清張氏とともに社会派推理小説のブームをつくった。現当主は頼義の長男頼央氏。

本稿は、秋田書店刊『歴史と旅』60/1
臨時増刊号の記事を拝借させていただきます。
ました。明記して深謝いたします。

編集部

宗鑑寺殿古鑑道衡大居士に關連して

宮田靖國

昨年、一九九〇年五月二十六日、兵庫県の竹田城頭で、赤松氏・山名氏兩軍陣歿諸靈供養塔落成開眼式典が盛大に挙行され、小生が僭越ながら司会をさせて頂きました事は無上の法幸でした。五月二十六日は応仁の大乱の火蓋が切つて落された日であり、又、去年は奇しくも、明徳の乱陣歿者の六百年遠忌に当たると共に嘉吉の乱に散華された方々の五百五十年遠諱にも当たっていました。誠に不思議な巡り合わせであり、すべては諸靈の御手に導かれての事としか思えません。

嘉吉の乱の事につきましては、あまり詳しい事を存じませんが、昨年暮に当方一族会お歴々の御法徳のおかげをもちまして、宗鑑寺殿、即ち、山名氏清公の六百年遠忌法要を村岡の法雲寺に於て、吉川広昭師によ

り修して頂きました。それで、山名氏一族が全滅したと言われる明徳の乱と、宗鑑寺殿に關連することを少々述べてみたいと思います。

山名氏一族全滅と言いつても、それは十一ヶ国内、九ヶ国、即ち山城、和泉、紀伊、丹波、丹後、美作、出雲、隠岐を失った事を意味し、但馬、伯耆、因幡の三ヶ国は義満將軍側に付いた時熙、氏之、そして宥免された氏家によって保つ事ができました。これは嘉吉の乱で赤松氏一族が全滅したと言つても、それは満祐公の一門であり、將軍側には赤松伊豆守貞村公があつて、播磨国を攻めておられるのと同じようなものです。源氏とは、古より一族を分ちて戦場に臨むこと少なしとしないので、足利氏然り、細川氏も亦然り

です。

しかしながら、一族相食むは武門の習いとは言え、悲惨の極みです。氏清と甥の時熙との戦いは悲痛であつたと思います。それは時熙の正室が氏清の娘であつたから余計倍加したと推測します。時熙公の正室が氏清の娘であつたことは、小坂博之先生が、その著「山名常熙と禪刹」の中で、『前南禅瑞岩禪師行道記』の「而母託之安栖無染、無染氏清公之女、而其宗巨川公夫人也」とあるから理解できる、と書かれています。巨川公とは大明寺殿巨川道熙大禪定門、即ち時熙公の事です。たゞ、明徳の乱当時、すでに時熙の妻であつたかどうかが疑問ですが、私はすでに妻であつたと思いません。確かに嫡男満時が生まれたのは応永三年です。明徳の乱から五年も経ている。だから明徳の乱後に結婚したのではないか、と考える人もいます。しかし、それは無理です。と、言うのは、但馬山名氏直系第二十九世山名武男様御秘蔵の系図には、氏清の娘で山名宮内少輔時瀨室と書いてある女子と、播州室と書いてある

女子との間には六人も名前が挙げられている。播州とは山名播磨守満幸公の事ですから、明徳の乱当時、播州室は既に満幸の正室であつた。時熙室はその姉として書かれていますのであるから、当時既に結婚してたと考えるのが妥当である。第一、その時、時熙公は二十五才である。早婚の時代に未だ独身だつたとは考えられない。さて、そうなると、氏清の娘、安栖無染、即ち、系図に言う安清開基大明寺御上にとつて、明徳の乱とは地獄の苦しみであつたろう。なぜなら父と夫が戦っているのだから。父と夫が戦っていると云えば、宗全の娘、即ち、細川勝元夫人も同じであつた事を想起する。

さて、南禅寺栖真院に於て、応永三十年十二月三十日、氏清の三十三回忌法要を南禅寺住持惟肖得巖によつて修した施主、つまり、「東海瑠華集」に言う京居奉菩薩戒孝女某とは、時熙公の妻、即ち氏清の娘、安栖無染であろう。

ちなみに、氏清の戒名であるが、よく宗鏡寺殿では

ないかと言われる。しかし、惟肖得巖禪師も、「宗鑑寺殿古鑑衡公大禪定門三十三回忌陞座云々」で始めている。又、山名家犬追物記である「篠葉集」には是豊が、「当家犬追物故実の一卷は、孫二郎殿の記是なり。然るに是は道静公の御時、宗鑑寺殿へ御讓候。愚祖にて候円通寺殿所望候へども、御ゆるしなく、あまつさえ公方より召候て、一卷は公庭にあり。其うつしは宗鑑寺殿所持申さるゝところに、去る明德の比ほひ、宗鑑寺逆意。故殿公方の御味方申たる故、一家のよしみ互にむなく、鉾先をとき申候訖、云々」と書いている。又それに政豊が、

「右篠葉一卷。叔父是豊之手跡也。依御所望進之者也。」

と書き添えている。これから見ても、当時の人々は氏清を宗鏡寺殿ではなく、宗鑑寺殿と言っていた事がわかる。たゞ宗鏡寺は氏清開基ではなく、時熙公が建立されたのであろう。

さて、時熙の妻と同様、氏清の妻にとつても明德の持明院正嫡とし、左中将正四位下能書家早世と後付けしている。これは代々、正二位大納言の家柄であったのに早世した為その位に就けなかった、と言う意味であろう。その女子に山名陸奥守源氏清室と註している。ただ、保脩ホシウには兄と弟がいた。兄は出家して又還俗した保世であるが、正嫡ではない。しかし、その娘には驚くべき事に、細川武蔵守源頼之朝臣室と尻付けしている。頼之は明德の乱で義満將軍を助けた、否、山名潰しを強行した人物である。妻は従姉妹という事になる。氏清が畿内近くの領国、即ち山城国、和泉国、丹波国、但馬国、摂津国半国が与えられた理由がここにある、と私は考えている。つまり、南朝色の濃い山名一族の中で、たゞ一人、北朝色が強く、細川氏に連なるのは実に氏清だったのである。もつと驚くべき事には系図に、時熙室の姉として細川讚岐守室とある女子がいた。つまり、氏清の妻にとつて、弟の持明院保定も、従姉も、娘二人も敵側にあつたのである。心中を察して余りある。六百年の昔の事ではあるが、冥福

乱は苦痛であつたに違いない。それは娘が時熙の妻という理由だけでなく、氏清の妻、即ち左中将保脩ホシウ女とは、実は持明院家の正嫡の姫だつたからである。持明院家とは、北朝を持明院と称することからもわかるように、代々北朝の院の御所となつていた。氏清は南朝から春日刑部少輔顯連によつて錦の御旗を授けられていたのであるから、矛盾することはなほだしかつたであらう。だからこそ、氏清の後を追つて自害し、湯水を断つて正月の十三日に亡くなつてしまつた。今、この拙稿を書いているのは正に六百年遠諱に當る命日、一九九一年一月十三日である。その追善供養に書けば、持明院家は羽林家の一つで、御堂関白道長の次男、従一位右大臣頼宗の系譜である。頼宗の孫基頼が邸内に持仏堂を建立し持明院と名づけた。その子通基は以て家号とし、その子基家の娘陳子は後高倉院の妃となり、後堀河院の国母となつた。その為、持明院家は里内裏ともなり、又、院政の御所ともなつた。この故に北朝は持明院統と称されるのである。「尊卑分脈」は保脩

を祈るや切である。

ちなみに、わが家の紋は、正紋が鷹の羽であり副紋が三つ引両である。三つ引両は氏清の紋であつたから当然であるが、鷹の羽は母方の縁に由来するといひ伝えている。たしかに持明院家は羽林（近衛府の唐名）家の一つではあるが、羽林家がすべて鷹の羽を家紋としたとも思えない。おそらく、宮田家の始祖が左近衛の大夫將監、従五位下であつたので、近衛府の鷹の旗からとつたのであろう。近衛は中世、元日の節会や即位式に鷹の旗を左右の兩陣にかかげたそうである。あるいは武官の武礼冠に鷹の羽をさしたからかもしれない。

さて、氏清の一周忌については、竹内秀雄氏が「北野経王堂に就て」という論文の中で「内野の戦の一年である明德三年十二月には義満は初めて萬部経会を内野に修する事を發願し、自ら法華經七部を頓写し、五山の僧一千人を以て大施餓鬼を行い「陸奥前司氏清幽儀并に諸卒戦死の亡靈六道の有情三界の萬靈悉皆得

道」と廻向した。と書いてある。たゞし、「明德記」は内野ではなく相国寺に於て、と書いてある。その場所は応永二年から北野南馬場に移り、応永七年には十月七日から十日間、北野右近馬場に仮屋を建て、法師千人が朝経四卷、夕経四卷の二座を勤行し、義満は毎日その聴聞所に入った。ついで、翌八年には氏清追福のために初めて経王堂を建立した。この時の導師は善応寺正範禪師であった。この僧侶は「明德記」にも出ている。「奥州、上総介、小次郎の死骸共、戦場の路辺に散乱れて取供養する人もなかりしかば、年来近付申されし善応寺正範禪師晦日晩景に御所へ参じて『此人々の有様共あまりに痛敷存候へば、御免を蒙て取納奉るべき』由申されければ『尤斗藪の御しるし然べし』と御ゆるされ有しかば、如形取納て一片の煙となされけり。——中略—— 聽て遺骨を取て嗟峨のあたりに忍てましましける御母儀の方へ進まられしかば、云々」とあるから、氏清の遺骨は母へ納められた事になる。問題は氏清の首級がどうなったかである。「南方紀

伝」には「右此時首級数百余輩雖有之、其中首八以実檢、大將首員外也、何首札附、名字書、氏清首母衣纏杉木掛、云々」とある。

ところで、吉田東伍博士著「大日本地名辞書」の北野神社の項に、「神州奇苑云、北野天満宮南の石鳥居の傍に、大なる五輪石塔あり、世に之を忌明塔と云ふ。——中略—— 按に此石塔は山名氏清の墓ならずや。

磧礫集曰、竹内法親王の仰に、北野の経王堂の良の礎は山名氏清の墳墓なり、乱世にまぎれていつしか唱失ひたり、内野合戦の後此に経王堂建てたまへば其墓も之に近かるべし云々」とある。

だが、室町時代の古絵図（大報恩寺藏）には一の鳥居東南に「経堂」として見えている。天和年間、経王堂を小堂に改築した時に、場所は以前より稍々西方に移つたものと考えられる。明治三年経王堂は廃仏毀釈によつて廢寺となり、山名知高公が建立された山名氏清碑は経王堂を支配していた大報恩寺に移されたのである。だから江戸時代にも盛大に営まれていたのであ

る。「山州名跡志」によれば、元禄頃には中央に四尺ばかりの、千手観音立像があつた、とある。

勿論、室町時代は毎年十月五日より十四日まで、毎日、一千人の僧が一部づつ同音で都合千部、十日間で一萬部を誦誦し、將軍は代々、義満の志を継ぎ、義持義教、義政と参詣して聴聞した。「年中恒例記」は、経王堂には棧敷が南北にあり、北は御台様、南は公方様と記している。

一、十月五日
一、北野御経へ渡御、先松梅院へ御成ありて御装束を被改、経堂へ渡御「云々」とある。

吉田家日記によれば、応永十年の食料は、僧侶が千人の定員で補欠の僧が百人、合計千百口に対して、一日に六千六百疋、十日間には六萬六千疋を要したのである。更に御布施においては、一人に鵜眼百疋、練貫小袖一重等云々とある。又、「満濟准后日記」によれば、永享元年には御布施は一人につき、三百疋で

あつた。たゞ、「親長記」は、文明十七年十月には僅かに三百四十五人の僧衆に過ぎない。これは偏に「依無御布施、近年如此」と書いている。下つて、天文十四年十月四日には、三好政長が萬部経会を営んだ。十月八日に参詣した山科言繼は「以外群集、市屋共不知数有之、種々勸進難盡筆舌」と、その日記に描写している。

私が言いたいのは、氏清公の墳墓は確実に北野天満宮の鳥居の近くにあつた、と言うことである。たしかに山名知高公の氏清碑文から考えて、鳥居の東から西に移つたかもしれない。しかし、どちらにしても、今の鳥居の内側、即ち天満宮本殿側にあつた。と考える。なぜ、その事にこだわるかと言えば、南方紀伝の言う宮田城の近く、宮田天満宮境内に、二百八センチの宝篋印塔がある。これは氏清の供養塔である。鎌倉時代の作と言う人もある。それなら氏清の祖父政氏の供養塔かもしれない。なんとすれば、鎌倉幕府の引付衆であつたから。あるいは康永二年（一三四三年）以降、

時氏は丹波守護であつて、旧山陰道を見おろす宮田城を氏清に築かせたのだから、時氏の供養塔かもしれない。しかし、それにしても天満宮境内と言うのは解せない。やはり、応永十六年九月五日に山名左近大夫將監入道調心が四代將軍義時から宮田庄を宛行われた事は動かし難い事実であるから、彼か、あるいはその子孫によつて建立された氏清の供養塔であろう。

又、東木之部の薬師堂にある一基の五輪塔と三基の宝篋印塔は、応永の乱や応仁の乱で討死した人々の墓と供養塔である。薬師如来は清和天皇の念持仏でもあつたが、日本三大妙見の一つであり、宗全公の祈願所でもあつた但馬妙見の御本尊が薬師如来であつた。

最後に、宮田庄を本貫とした宮田氏は、応仁の乱で政豊公に従つていたので、東軍の是豊公に付いていたので、と尋ねられるので、二つほど証拠をあげて陣歿諸霊の供養としたい。大外記であつた中原康富の日記の享徳三(一四五四)年十二月三日の条に、

「山名弾正少弼弟七郎、并少弼子息次郎、宮田等出

戦つて、享祿四(一五三二)年辛卯六月、高国公の敗死と共に摂津国で討死した宮田五郎豊武と言う者がいた。この高国公の姫君が山名豊国公の御生母であることを想起する時、丹波の宮田氏は山名家と細川家の間に立つて腐心奔走し、和睦に尽瘁する姿が眼前に彷彿とするのである。

毎年初夏に沙羅双樹の花を賞する為、妙心寺塔頭東林院へ伺うが、そこが両公の菩提寺である事は、そこはかとなく宿縁を感じる。

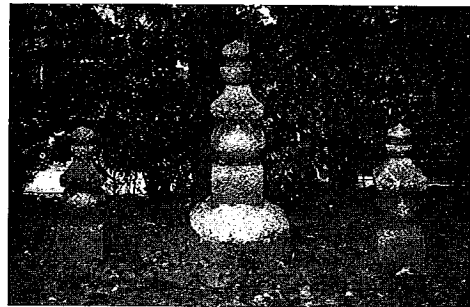
仕也。去月二日山名金吾入道云々」と、あつて宗全の代りに教豊か政豊が出仕した事がわかる。それに宮田が従っているが、これは宮田民部少輔教実である。

又、「東寺執行日記」の文明六年四月三日の条には「同夜細川聡明殿(政元)と山名少弼殿和睦治定之由風聞、此夜先山名宮田殿御内垣屋以下五人馬引かせて細川殿へ礼被申、聽又細川殿師子草殿御内安富以下五人馬引て、山名殿へ礼被出申、其後又聡明殿御母子山名殿へ御出、御酒有之由承及也」と、ある。

和睦のお膳立てをしたのは、おそらく宮田備後守であろう。それは、いつまでも敵対関係にあつては、宮田庄の保全に支障をきたすからである。この記事によれば、聡明殿母子、即ち政元とその母(宗全の娘)が山名邸へ入つた事が分る。勝元の未亡人にすれば里帰りであつたが、細川政元を連れて帰つた処が重大なのである。聡明丸は当時九才であつたから、山名政豊が後見人となり、山城国守護ともなつた。後年、政元の後継者である管領細川高国公の軍に加わり、三好勢と

梅津長福寺と宗全公茶毘塔

京都市右京区梅津中村町
丈梅山 長福寺境内



中央が宗全公の塔

文明五年三月十九日山名宗全公は公の再興された長福寺で七十才の生を閉じられた。遺骸は同寺境内で火葬に付される。
今、火葬跡に建つたさやかなこの五輪塔には訪う人も絶えてないというが、青苔緑陰のこのところこそ、一代の英雄にはかえつてふさわしい安禪の床ではあるまいか。

なお、公の御廟所は洛東南禪寺塔頭の真乘院に巨石をもつて築かれているが、いづれもが山名氏末裔にとつては聖域のはずである。一度参詣されるようお奨めします。

(事務局 吉川 広昭記)

「太平記」と赤松氏

事務局 吉川 広昭

ことしの正月からNHKで大河ドラマ「太平記」

が始まったが、ここでわが赤松氏ほどのように扱われているかを探ってみた。といっても脚本の原

本を見たわけではないので何とも言えないが、日本放送出版協会刊の「太平記」では何と赤松氏の

アの字も出てこないではないか。そこで、原作の吉川英治「私本太平記」に当たってみた。しかし、ここでもほんの僅かしか書かれていない。尤も、これはもともと小説なんだから、史実と違うなどと言える筋ではないのだが、我々末孫のものとしてはいささか心淋しくもの足りぬ思いがする。そこで、私なりに「太平記」時代の赤松氏の動向を

窺ってみた。
赤松氏は村上天皇の皇子具平親王を祖とする播州の豪族である。
謹ンデ赤松氏ノ家牒ヲ按ズルニ、昔村上天皇王子有リ。具平親王ト曰フ。時ニ六條宮ト号シ、後ニ中務郷ト称ス。才芸世ニ絶ス……親王ノ嗣久我大臣タリ。大臣ノ華胄分レテ武家ト為ル。播磨守家範ナル者有リ。始メテ赤松ト号ス。家範四代ノ孫ヲ則村ト曰フ。法名円心。月潭ト号ス（景徐周麟「翰林葫蘆集」）

赤松氏といえは「円心」が代表者として浮びあがるが、円心は弘安二年に茂則の息として生れた。この年

弘安の役がおこる。幼名次郎法師丸。長じて則村という。青年から壮年にかけて大番役勤仕のため度々上洛した。正和五年（一一三六）三十八才で一族の本拠である白旗城を継承した。四十八才頃入道し、以後円心と号している。

円心の三男則祐は比叡山に上り、天台座主尊雲法親王（大塔宮護良親王）に随侍していた。彼を権律師則祐と称する所以である。（権律師とは僧正・僧都・律師という僧官の初位である）

文保二年（一一三二）後醍醐天皇即位。

正中元年（一一三三）正中の変。第一次討幕計画発覚。

元弘元年（一一三三）元弘の乱。第二次討幕計画失敗。

後醍醐天皇は笠置寺に逃れられたが、囚われの身となり、翌年隠岐島配流となった。大塔宮も南都へ潜入して令旨を各方面に発し、討幕拳兵を凶る。宮側近の権律師則祐は父円心を説いて蹶起を促した。

元弘三年一月二十一日 円心拳兵。

円心は大塔宮の令旨を奉じて兵を挙げ、直ちに近隣の幕府方を攻撃した。

一月二十七日 高田兵庫輔を高田西条山城に破り、次いで備前三石城に伊東維群を破る。

二月十五日 円心、摂津赤松城に六波羅軍と戦う。

二月二十一日 大塔宮、播磨太山寺・摂津箕面寺の衆徒に赤松城に結集を命じる。

二月二十五日 円心、摩耶山城に六波羅軍と再び戦う。

三月十二日 円心、摂津瀬川で幕府軍に大勝し、一気に京都に進撃するも敗退。

と、このように建武中興の先陣を切って円心は歴史の舞台に颯爽と登場するのである。円心時に五十五才。まさに名の通り円熟の境に達した驍将ぶりであったろう。

因みに、足利高氏の挙兵はこれより遅れて四月であるし、新田義貞は五月に蹴つてゐる。

このごろ、後醍醐天皇は隠岐を脱出、名和長年の先導で大山寺末寺の船上山（寺）に行宮を設けられる。

四月二十七日 八幡の戦いで円心の将佐用範家、

幕軍の総大将名越高家を討取り幕軍総くずれとなる。

五月七日 円心、足利高氏と共に六波羅を攻略する。

五月二十七日 円心、天皇を兵庫に迎え軍功を賞せられる。

六月一日 円心、天皇還御の先駆を勤める。

六月二十三日 円心、信貴山城より大塔宮を迎え

先駆して入京。

八月 円心、軍功により播磨国守護職に任ぜられる。

円心にとっては生涯最高の日々であった。「天下草創ノ功ハ偏ニ汝等鼻肩ノ忠戦ニヨレリ。恩賞ハ各望ニ

任スベシ」との優渥な勅旨によるものである。然し、その感激は暫くのことであった。翌建武元年（一三三三）円心は播磨守護職を解かれ、僅かに本貫の地である佐用庄の地頭職だけを安堵されるのである。この懲罰ともいえる処遇の理由は何であつたのか。

思うに円心の忠勤は大塔宮を通じてのものであつたが、その大塔宮が建武政権に容れられず、一度任命された征夷大将軍の職も剝奪され、更には鎌倉の足利直義の許で幽閉されるという悲劇との関連によるものであろうか。ともあれ、建武の創業に諸將に先んじて参加し、自他共に認める戦功をたてた円心にとっては、まさに青天の霹靂であつた。忿懣と屈辱を内に、一族とともに赤松へ引揚げた円心の心事は察するに余りがある。ただ一つの救いは、天皇の側近第一といわれる万里小路藤房の円心弁護であらう。

元弘大乱ノ始、天下ノ士卒挙テ官軍ニ属セシ事更ニ無他。只一戦ノ利ヲ以テ勲功ノ賞ニ預ラント思ヘル故ナリ。（中略）

今度天下ヲ定メテ君ノ宸襟ヲ休メ奉ル者ハ高氏・

義貞・正成・円心・長年ナリ。其志節ニ当リ義ニ

向テ忠ヲ立所、何レヲカ前トシ何レヲカ後トセン。

其賞皆均其爵是同カルベキ処ニ、円心一人僅ニ本

所一所ノ安堵ヲ全シテ守護恩補ノ国ヲ被ニ召返事、

其咎ソモ何事ゾヤ……」

との諫言に天皇は「竜顔少シ逆鱗ノ気色有テ」黙殺されたとある。

建武二年七月 北条高時の遺子時行、信濃に挙兵

し、鎌倉を攻略。

直義西走する（中先代の乱）

尊氏はこれの鎮圧に東下するに当って、円心に協力を乞うた。円心は二男貞範を派して盟に応えた。

同年十二月 箱根竹の下の戦い。

貞範は勇戦して義貞の軍を破っている。尊氏はこの時に天皇と建武政権に訣別を告げ、武家政権樹立のため軍を京に進めた。先陣は嘉例により赤松氏が承つた。

建武三年一月 天皇比叡山に避難。尊氏入京。北

畠頭家軍追尾。

同年二月 円心、敗走の尊氏を援ける（室泊

の軍議）

この時円心は、名分にこだわる尊氏に、光厳上皇（持明院統）の院宣を受けるよう勧めた。院宣——錦の御旗である。これがあれば逆賊の汚名は立所に濯がれ、士気も振いたつ。円心の助言と斡旋が奏功して、尊氏は備後鞆津に着いた時、急拠下向した院使の醍醐寺三宝院賢俊より義貞追討の院宣を受ける。

建武三年四月 新田義貞、播磨白幡城に円心を圍

むも陥落不能。

同年五月 尊氏軍、九州勢を率いて東上、義

貞軍囲みを解いて兵庫に退き布陣（湊川の戦い）

光厳院の錦旗をいただいた尊氏・直義軍は水陸両面に分れて破竹の勢いで東上する。白旗城で孤軍よく五十余日の間新田勢をくい止めた赤松軍は、ここでも先

鋒となつて陸の直義軍に加担する。

建武三年六月 尊氏入京。

同年八月 光明天皇踐祚。

同年十一月 尊氏幕府を開く。

このころ円心、播磨守護職に任ぜられる。

建武四年 円心、光明天皇より軍功の賞として直垂を拝領。

同年八月 円心の長子範資、摂津守護職を受けける。

この後も摂津播磨の各所で南軍との交戦が続くが、円心は老令の為であろうか、戦場には子息の則祐や貞範・範資の名が多くみられる。

晩年に至つた円心は、名僧雪村友梅に帰依して白旗城西方の苔繩に法雲寺を建て、また播州清水寺造宮に意を用い、建仁寺に大竜庵を興して己が塔所とするなど、破乱の生涯にふさわしい幕引きを心がけているようである。

貞和元年（一三四五）円心六十七才。赤松氏総領

家を引退。

観応元年（一三五〇）一月十七日、円心京都七条

邸に歿する。寿七十三才。

法雲寺殿月潭円心。

建武中興の主人公後醍醐天皇はこれより十一年前の延元四年南山にて薨去。それに対する足利尊氏はこれより八年後の延文三年に歿する。南北朝の動乱に生き抜いた円心公の生涯ははたして如何なる評価を受けるのだろうか。

あとがき

◎ 昨年五月、竹田城址にできた両軍陣歿者供養塔が登閣者の注目を浴びています。数百年前の攻防が平成の今日まで忘れ去られずに守り伝えられていることを知り、今さらのように歴史の重みを感じたとお声をいただいで、やはり良かったんだなあと喜んでおります。

◎ 今号は赤松氏を主にした編集になりました。末裔登場や名簿欄に山名氏関係も収載のはずでしたが、両氏同時では何かスッキリしないようでした、また紙数の都合もあって、山名氏の皆さんは次号にゆずることとさせていただきます。お申込くださいました各位には申訳なく存じますが、どうか次号までお待ちいただくようお願い申します。

◎ 昨秋九月、山名宗全公の御葬所を、宮田先生のご

案内で、京洛西梅津長福寺に訪ねました。文明五年この地で火葬にされた跡地には五輪の茶毘塔が、ひっそりと青苔に埋もれて鎮まり給うておりました。

南禅寺真乘院のお墓は世に知られておりますが、この方はどなたもご存知ないようで……とは梅津老師のお言葉でした。(二十二頁参照)

◎ 二月某日、こんどは赤松円心公のお墓を訪ねて東山の建仁寺へまいりました。観応元年七条邸で逝去された公は、山内の大竜庵に葬られますが、古型のドッシリした宝篋印塔は現在、塔頭久昌院墓地に移遷奉安されております。ここでも、播州法雲寺の御廟所は有名ですが、こちらはあまり知られておりませんので……と野田老師が淋しそうに述べられました。申訳ないことです。(口絵写真参照)

◎ 温故知新。この小冊子を踏み台にしてどうぞご研究の程を。

山名氏
赤松氏 研究ノ一ト 第2号

平成三年四月二十日発行

編集・発行

山名両氏顕彰会
赤松

兵庫県美方郡村岡町山名寺内

(事務局 吉川 広昭)

印刷 榎谷本紙業

兵庫県城崎郡日高町江原